

『保育者が抱える困難と望まれるサポートを考える

—保育者、養成校教員、研究者の対話を目指して— 報告

（日本質的心理学会 研究交流委員会・保育教諭養成課程研究会 企画）

上記テーマのもと、2017年10月21日（土）14時から17時まで日本体育大学世田谷キャンパスでシンポジウムを実施した。シンポジウムは二部構成であった。第一部はテーマに関する話題提供とコメントで構成した（約2時間）。第二部は登壇者と参加者がテーブルにわかれて、テーマについて懇談を行った（約1時間）。

■登壇者と話題提供・コメントの内容（敬称略）

- ・ 若尾 良徳（日本体育大学児童スポーツ教育学部）『保育者の結婚とキャリア形成の両立における課題』
- ・ 香曾我部 琢（宮城教育大学教育学部）『保育者の離職と再就職プロセス』
- ・ 宮里 暁美（お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所、お茶の水女子大学こども園園長）『コメント：実務家・養成者の視点から』
- ・ 土倉 英志（浜松学院大学現代コミュニケーション学部）『コメント：質的研究の視点から』

■概要

第一部では、若尾先生と香曾我部先生が、保育者の離職と再就職にまつわる問題にたいして、質的研究の手法を用いてアプローチした研究を紹介した。

若尾先生は、結婚による離職を促進する要因・とどまらせる要因を探っている。保育者を対象としたアンケートの自由記述の分析、インタビューの分析にもとづき、保育職に固有の労働環境、保育者に特有のキャリア意識があることを詳細に説明した。対策として、職場環境や勤務条件を改善すること、（養成校での）キャリア教育の重要性を指摘したほか、保育者の専門性を発信していく必要性を述べた。

香曾我部先生は、複線径路等至性アプローチに依拠し、保育者の離職と再就職のプロセスをインタビュー調査で明らかにしている。話題提供では、1つには、仕事にまつわるネガティブな感情が保育者アイデンティティに与える影響とそのプロセスを、もう1つは、山脈的自己の観点から、複数の自己の対話的關係に注目することで、離職を「スタンバイ

離職」と「スイッチ離職」に概念的に整理した。これらの知見を踏まえて、潜在保育士への対応を含む、今後の対応策を提言した。

話題提供を受けて、宮里先生は、離職をネガティブにとらえるのではなく、成長の機会ととらえる見方があること、他の園との協働体制を築くことが重要であることを指摘した。

土倉は、保育者の離職・再就職をめぐる問題について（も）、質的な研究手法をもちいてアプローチすることに意義があることを指摘した。

第二部では、登壇者・参加者が3つのテーブルにわかれて懇談を行った。養成校の教員、現職の保育者の参加者が多かったことから、話題提供やコメントを踏まえた対話のほか、自身の経験にもとづく話もなされ、話題が尽きない様子であった。

■おわりに

シンポジウムの副題に示したとおり、「保育者、養成校教員、研究者の対話を目指して」、本イベントを企画した。イベントを通じて、それぞれの園や養成校の境界をまたいで対話をおこなう場が求められていること、対話を重ねることで、経験をこれまでとは別のかたちで言語化していくことの意義を再認識した。

「保育者の専門性」を言語化／可視化し、外部に専門性を発信していくうえで、また、保育者自身が専門性を自覚的に語れるようになるうえで、質的研究が果たす役割は大きいと感じた。

以上